

教科目標は、どう変わったのか。

【平成 11 年度改訂の教科目標】

「自然に親しみ、見通しをもって観察、実験などを行い、問題解決の能力と自然を愛する心情を育てるとともに、自然の事物・現象について理解を図り、科学的な見方や考え方を養う。」

前回の改訂では目標の中に「見通しをもって」が加えられた。「見通しをもって」とは、子どもが見いだした問題に対して、予想や仮説をもつことを意味し、「解決への方向性」と「解決の手だて」を明確にすることである。このことは問題解決の活動を主体的に進めるために重要なポイントである。



【平成 20 年度改訂の教科目標】

「自然に親しみ、見通しをもって観察、実験などを行い、問題解決の能力と自然を愛する心情を育てるとともに、自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図り、科学的な見方や考え方を養う。」

(下線・波線・太字は筆者)

新学習指導要領においても、この「見通しをもって」という文言が残された。このことは、これまでも増して子どもの主体的な問題解決の活動を重視しているものととらえることができる。

また、今回も一点「実感を伴った」が入れられた。この「実感を伴った」という表現は、特に目新しい言葉ではない。この言葉について、文部科学省の日置光久視学官は、「学んだことを長期記憶に入れておくためには、この『実感を伴った理解』ということが必要です。」と述べている。「長期記憶」、このことは本県の課題でもあり、この「実感を伴った理解」➡が一層求められる。

「見通しをもって」という文言は観察、実験を行う前のことで、前回の改訂では、この部分の充実が図られた。

今回の「実感を伴った理解」は、観察、実験が終わった後のことであり、結果を整理して考察を深め、結論をつくっていく部分の充実が図られた。このように、観察、実験を挟んで前の部分と後の部分で両方の充実を図り、全体として問題解決の活動が一層充実することをねらいとしている。